

一八八二年十月二十八日(土)

シンティのブラフマ協会への出席

——シヴァナート氏はじめブラフマ会員たちと共に楽しい会話

ブラフマ協会のおける聖ラーマクリシュナ

シユリーシユリ
大聖ハラマハンサ様は、シンティのブラフマ協会の集まりにご出席になつてゐる。キリスト曆

一八八二年十月二十八日、土曜日。アツシン月の黒分二日目のこと。

今日はここで大祭がある。ブラフマ協会で年二回行ふ祭典である。それで至聖なる聖ラーマクリシュナは、ここに招待を受けられた。三時から四時の間に、タクールは数人の信者達といつしよに、馬車トツキトシヨルで南神村のカーリー殿からベニー・マータヴァ・パル氏所有の素晴らしい別荘にお着きになった。この別荘でブラフマ協会の会合が行われていた。タクールは、このブラフマ協会が、大のお気に入りである。ブラフマの会員たちもまた、この御方を純粹な気持ちで心から尊信しているのであつた。前の日、即ち金曜日の夕方には、大へんな御機嫌でケーシャブ・セン氏やその仲間たちといつしよに、カーリー殿からカルカッタまで信者たちもお供して、蒸気船に乗つて楽しい船旅をされたのであつた。

シンティはバイコパラの近くでカルカッタから5 kmほど北である。その別邸は美しく結構なことで評判であった。場所はないそう静かで、至聖かみに祈るのには絶好の地である。別邸の主は、毎年二回の大祭にここを提供していた。一回は秋に、あと一回は春である。この大祭のために、彼はカルカッタやシンティの近隣の村々から大ぜいの信者たちを招待していた。それで今日も、カルカッタからシヴァナートをはじめとする会員たちが来ていた。彼等のなかでかなりの人数が朝の祈りに出席していたし、夕べの祈りにも参加しようとして待っていた。特に彼等は、午後到大聖者がいらっしやって、その方の楽しげなお姿を拜見でき、胸に染み入る天の美酒うまざけのような真理のお話を聞くことができ、神を讃えるあの甘美な歌声を聞いて、天人の舞いもはるかに及ばないような神の愛にあふれる踊りを拜見することができらうことを聞き知っていたのだから。

午後になると、庭園には大ぜいの人で溢れるばかりになった。ある者は木陰の木製のベンチに腰掛けている。また、ある者は美しい池の端を仲間たちといっしょに散策している。大部分のものは集會堂の中で聖ラーマクリシュナの到着を待ちながら、随分前からそれぞれ席をとって坐っている。庭園の入口にはキンマの葉を売る屋台が出ている。中に入ってみると、いかにも祈禱祭かへんさいをしている家のような感じで——夜になると宗教劇が行われる模様である。その辺一帯が楽しさで満ちあふれている。カラリと晴れ上がった紺碧こんぺきの秋空もまた、喜びに輝いている。庭園の灌木かんぶやつる草の茂みには、早朝から清々すがすがしい風が歓喜よろこびの声をささやいている。空も生き物も、草の茂みに至るまで、いっしょになって歌をうたっているようだ。(訳註、キンマの葉——びんろうじゅの実や石灰と一緒に嚼んで清涼感を楽しむ嗜好品)

「今日、わが生命、歓喜の風にそよぎ——主なる神、祝福の光ふりそそぐ！」

誰も彼も渴きで死にそうな人が水を求めるような気持ちで、あの神聖な御方を待ち焦がれているのだった。そこへ、折しも大^{レリー・シヨリ・ユリ・バラマンサ・デーヴ}聖正覚者様のお乗りになった馬車が集会堂の正面に到着した。

皆、立ち上がってこの霊の大偉人をお迎えした。その御方はこつちへ入っていらつしやる。あたりの人々はその御方を取り囲んだ。

集会堂の中心になっている部屋には祭壇が設けられている。その場所に人々はギッシリ詰めかけた。正面の大広間には大覚者様がお坐りになっていらつしやるのだが、もちろんそこも人でいっぱいだし、また、大広間の両側にある部屋にも人、人、人——。部屋の戸口にも溢れるばかりに人々が立っている。大広間に上がるため、階段が部屋の端から端まで広がっているのだが、その階段にまで人が溢れている。階段から程遠からぬところに二、三株の灌木^カがあつて日陰になっており、そこにいくつかのベンチが置いてあるが、そこからもまた中へ入れなかつた人々が散らばって立ち、首を伸ばして霊的大偉人のおられる方にじつと目を凝らしている。果実のなつている樹や花の咲いた樹が列になって植えられている間に道がある。樹々はさわやかな風にやや揺れ動いているのが、ちようどうれしように頭を下げて、その御方を歓迎しているようである。

タクル、大覚者さまはここにこ笑いながら座にお着きになった。すべての視線はひたすら、この方の喜ばしげなお姿に集中した。劇場で演技^{シバ}が始まらぬうちは、観客の群の中は笑っている人があつたり、世間話をしている人たちがいたり、一人かまた仲間連れでその辺をぶらついていたり、キンマ

を嘔んだり、タバコを吸ったりしているものである。だが、舞台の幕がまさに開けられると、すべての観客はビタリとムダ話をやめて、脇目も振らず熱心に舞台に見入るものである。又、いろいろな花の上を飛びかっていた黒蜂が蓮華の花叢はなむらを発見すると、ほかの花には見向きもせず、ただもう蓮華の蜜を我を忘れて吸い続けるものだ！

信者との会話

いかなる場合でも心身を尽くして

わたくしを信じ愛し仕える者は

速やかに物質ブラクリテイ自然の三性質をのり越えて

ブラフマンに到達するであろう

—— ギター 14 — 26 ——

笑顔でタクールは、シヴァナート氏たち信者の方に目を向けられておっしゃった。

「やあ、シヴァナート！ほんとにお前たちは信仰心深い人たちだ。お前たちに会えてとても嬉しいよ。大麻吸いは大麻吸いに会うとやたらに嬉しがるものだ。抱きついたりすることもあるほどだ」

シヴァナートはじめ皆も楽しそうに笑った。

〔世俗の人の通性——御名の栄光〕

聖ラーマクリシユナ「神様に気のない人がわたしのところに来ると、わたしはこう言つてやる。お前たちはアツチの方へ行つて坐れとね。そうでなければこう言う。行つて、結構なお寺やお堂（カーリー寺院の建物）を見学しなさい」と（皆笑う）。

信者たちに付いて、つまらない連中もやつてくる。欲のかたまりみたいな人間がね！ 神様の話にはさっぱり興味がない。信者たちがわたしとしばらくの間、神について話し合つていると、もう辛抱ができなくなつてソワソワします。信者の耳元に口を寄せて舌打ちしながら、いつ出る？ 君、いつまでいるつもり？ なんて言つているのだ。信者たちが、もし少し待つてくれ、もししたら出るから——と言おうものなら、ムツとしてこう答える——「じゃあ、君たち話してたまえ。我々は船に戻つて待つてゐるから」（一同笑う）

世間の人たちに、すべてを捨てて神様の蓮華の御足に身も心も投げかけよなどと勧めたところで、連中はそんなこと耳に入れるものか。だから、チャイタニヤとニタイの兄弟はいろいろ考えたあげく、欲深な連中をすこしでも神様の方に惹き付けるために、こんなうたい文句を考へて看板にした。

女房のつくつた魚のスープ、若い娘の胸のふくらみ。さあ、神の御名を称えよう。はじめのうちは、この二つに惹かれて大ぜいがハリの名を称えたものだ。神の御名という天の美酒をすこし味わうと、女房のつくつた魚のスープ、というのはほかでもない、神の愛にむせてこぼれる涙がそれなんだ、ということが分かつてきた。若い女は、つまり大地のこと。若い女の胸を抱くというのは、つま

り神の愛を感じて身も世もなく土の上を転げ廻ることなんだよ。

ニタイはどんな方法を使つても、何とか人々に神の御名を称えさせようとした。チャイタニヤはこう言っていた——神様の御名を称えることはこの上なく神聖なことである。すぐには結果が顕れなくとも、いつか必ず実を結ぶだろう。ちょうど屋根の蛇腹におちた種子のように、日が経つて家が大地に還つたとき、その種は芽を出し実を結ぶ」と

〔人間の性格——信仰の三つの性質——サットヴァ、ラジャス、タマス〕

「世間の人たちのなかにもサットヴァ、ラジャス、タマスの三つの性質がみられるが、それと同じで、信仰にもサットヴァ、ラジャス、タマスの三種類がある。

サットヴァ性の社会人はどんなふうだか知っているかね？ 家はあちこち壊れていてもさっぱり気にかけない。神様を祀つてある部屋でハトが糞をしたり、庭は苔だらけになつても平気だ。家具は古くてガタピシしているのに、手入れして小綺麗に見せようとしめない。着る物だつて一枚かそこからで間に合えばいいのだ。人柄はたいそう穏やかで気は練れているし、親切で謙遜だ。そして、人の嫌がるようなことは何一つしない。

ラジャス性の社会人の特徴はこうだ。鎖のついた時計を持って、手には二つか三つ指輪をはめている。家のなかには家具その他きれいに整頓してある。壁にはビクトリア女王の肖像画や皇太子の肖像画とか、ほかの誰か有名な偉い人の肖像画なんか掛けてある。家は真っ白に塗ってシミひとつない。

いろいろな種類の立派な衣装を持っている。召使いたちにもきちんとした身なりをさせておく。とにかくすべてこんな調子だ。

タマス性グダの社会人の特徴はね、眠ることが好きで、愛欲には溺れ、すぐカツと怒り、自惚れうぬぼが強い。それからサットヴァ的な信仰がある。サットヴァ性の信者というのがあるが、この人たちは人に知られないようにして瞑想する。蚊帳カヤの中で瞑想したりするので、皆はかれが眠っているものだと思つている。夜よく眠れなかったものだから朝起きるのが遅いのだらう位に思つている。肉体からだへの関心は、ただ飢えを満たすだけ。米と野菜を僅か食べればそれでいい。食べるものについて何の注文もない。着ているものを人に見せようなんて気もない。家の家具調度を見せびらかさうとも思わない。それにサットヴァ性の信者は、お世辞を使つて金を受け取るようなことは決してしない。

ラジヤス的な信仰を持っている人は、額にティラクマイラク(その人の宗派を示すために額や眉間につける印)をつけて、ルドラクシヤ(菩提樹の実)で作つた数珠マールを持っている。しかもその数珠マールのところどころに金の玉が混ざっている(一同笑う)。勤行おつとみのときには絹の衣装を着てする」

偉大なる御名と罪——霊の教師の三段階

ブリターの息子よ 女々しいことを考えるな

それは君にまったく不似合いだ

敵をこらしめ罰する者よ

卑小な心を捨てて さあ立ち上げられ！

—— ギーター 2—3 ——

聖ラーマクリシュナ「タマスのな信仰を持つ人の信念は燃えている。この種の信者は、神様に対しても力ずくだ。強盗が金を引つたくるように、神様から否応無しに恩寵おめぐみをもらってくる。殺せば殺せ、斬らば斬れ、縛りたかったら勝手に縛れ」というわけだ。つまり、強盗式態度だ」
タクルは目を上に向けて、愛情のこもったお声で歌われた——

ガヤー ガンガー プラバースヤ

カーシー カーンチーに行かずとも

カーリー カーリー カーリーと呼んで

私は最期の息をひく

朝、昼、晩にカーリーを呼べば

祈禱いのりも勤行つとめも要りはせぬ

勤行はあなたのそばまでいくが

決していつしよになりはせぬ

慈善、誓願、賜りもの

そんなものには目もくれず

この世の愛をひとまとめ

大実母のみ足に捧げよう

カーリーの御名の不思議な力

それは誰にもわからない

神のなかの大神シヴァさえも

御名の光榮を讀えます

タクールは我を忘れ、火のように燃えて歌いつづけられる——

ドウルガー、ドウルガーと我呼べば

ドウルガー——カーリーの別名

死も貧しさも何のその

神の救いを疑わず——

「ナニ？ 私はあの御方の名を称えているんだ——その私に、今さら罪だなんて！ 私はあの御方の

息子だよ！ あの御方の御威光の世嗣よつぎなんだ！ —— こういう心構えていなけりやね！

タマス性を霊的なものに転換かえると神様をつかむことができる。あの御方に強制するんだよ。あの御方は他人じゃないんだ。あの御方は実際、一番近くて親しい自分の肉親なんだからね。それにほら、このタマス性を皆の幸福のために使うこともできる。

医者には三種類あつてね、つまり上医と、中医と、下医だ。来て病人の脈を診て、薬を飲みなさいと言っただけで帰ってしまうのが下医で、あとでちゃんと薬を飲んだかどうかさえ確かめない。病人にいろいろと病気の様子を説明して聞かせ、あげくにやさしい言葉で、ね、薬を飲まなかつたら良くなる筈がないでしょう。さあ、ラクシュミー、私があなたに合うように自分で調剤した薬だから、ほら、お上がり—— こういうのが中医。それからこういう医者—— 病人が何とかかんとか理屈を言つて薬を飲まないのを見ると、病人の胸ぐらを抑えつけて、力づくで飲ませてしまうのが上医だ。これがタマス性医者で、病人のためにこそなれ害にはならない。(訳註、ラクシュミー—— いい子ねほどの意味)

医者と同じように、霊の教師アーチャーリヤにも三種類ある。宗教上の指図をしてやるだけで、あとは弟子の進み具合も見ずに放つたらかしにしておくようなのは下の教師。弟子がよくなるように、いろいろ手を変え、品を変えて教えて下さり、自分の与えた教訓が弟子の身に付くようにしつこいほど世話を焼いて下さる、愛情を見せて下さる—— こんなお方は中位のところにいる教師だ。それから、弟子がツベコベ理屈を言つて先生の言うことをきかないのを見て、力づくでもやらせてしまう、こういうお方を上師というのだ」

ブラフマンの性は口で説明出来ない

心も言葉も共に達し得ぬところ

—— タイティリーヤ・ウパニシヤド 2—4 ——

一人のブラフマ協会の会員が、神は有形か無形かという質問を出した。

聖ラーマクリシュナ「あの御方はこういうものだなどと言い切ることは出来ないよ。あの御方は形がないし、また形もある。信仰者にとっては、あの御方は形がある。智者、つまり世界は夢まぼろしであると観る人々にとっては、あの御方は形がない。信仰者は、自分というものはある一つのもの、世界はまた別のものと感じている。だからこういう人にとっては、神様は人格となつて顕われて下さるのだ。ヴェーダーンタ派の人たちのような、いわゆる智者の場合は——この人たちはただひたすら、これではない、これではない」と決めつけていく。この判断を続けていつて智者は、私というものも錯覚だし、世界があると思つているのも錯覚——夢か幻のようなものだということをはつきりと感じ取つて、そしてブラフマンを悟るのだ。あの御方はどんなものか、口でなんか説明出来ないよ。

見当が付かないかね？ サッチダーナンダ（実在・智慧・歓喜）の大海——無辺際の大海だ。信仰という霜があるところで、あちこち水が氷になっている。氷の形に結晶しているんだ。つまり、信仰者か

ら見ると、あの御方は人格があるもののように時々お姿を現していらつしやる。智識の太陽が上がる
とその氷は溶けていつて、そうなればもう神を人格あるものとは感じられなくなるのだよ。あの御方
のお姿も見られなくなる。あの御方はどういうものだなんて口で言えなくなる。いつたい、誰が言え
るんだね？ 言いたい人はもう無いんだもの。その人の「私」はどこ探したつて無いんだよ。

よくよく考えてみれば、ワタシとかジブンなんてものはどこにもありやしないんだよ。タマネギの
最初の赤い皮をあんた、剥いてごらん、次は白い厚い皮だ。次から次へと剥いていけば、中には何も
ないんだよ。(訳註——インドのタマネギは外の皮だけ赤く中は白い)

自分の「私」がどこを探しても見つからないという場所——それに、探してるのはいつたい誰だろ
う？——そこで、ブラフマンの性相を感じ取る——こういう状態になって、いつたいその様子を誰
が話すのかね！

塩でつくつた人形が海の深さを測りにいった。海の中に入つていくにつれて溶け出して、海といっ
しょになつてしまった。さあ、誰が海の深さを報告する？

完全な智識のしるしはね、智識が完全なものになると人は黙つてしまう。そのとき、「私」とい
う形の塩人形はサッチダーナンダの大海に入つて一つになり、差別の感じがすこしも残つてない。

考えることを卒えないうちは、人はああでもないこうでもないかと議論する。卒業してしまえば黙
ようになる。水がめが一杯になつて池の水と一つになつてしまえば、ゴボゴボ音はしなくなる。い
っぱいにならない間は音がする。

昔の人は言ったものだよ、黒い海カラバニに船が出て行くと、もう戻らない(訳註)ってね」

「私ワタシはどうしてもなくなならない」

「私ワタシがなくなつてしまえば、悩みも苦しみも消えてしまふさ、ハッハッハ。ところが千遍も考へて決心したつて、私ワタシはなくなならない。だから、あんたやわたしのような場合は、神の信者である私ワタシと、こう誇らしく思っているのが良いのだ。」

信仰者バクダにとつては、サグナ(属性のある・ブラフマンだ。つまり、あの御方は様々な性質や徳を具えていらつしゃつて、ひとりの人格として姿をとつて現れて下さるのだ。祈りを聞いて下さるのはその御方だ。あんた方が祈っているのは、その御方に祈っているんだ。あんた方はヴェーダーンタ派の人たちのようじゃない。智行者ジュヤヤニじゃない。あんた方は信仰者バクダだからね。形のある神を信じようと信じまいとどつちでもいい。神様をひとりの人格として感じていればそれでいい。その御方が祈りを聞いて下さり、創造、維持、破壊をなさり、その御方が無限の力なんだからね。

信仰バクダの道を通れば、あの御方を得るのは簡単だ」

見神——有形の神か、無形の神か

アルジュナよ

わたしを信じ愛慕することよつてのみ

わたくしの真実の姿を見、知り得るのだ

そしてわたしに帰入できるのだ

おお 敵を滅ぼす者よ

——ギーター—— 11—54 ——

ブラフマ会員の一人が、「先生、神を見ることはできるものなんですか。もしそうなら、私共が見られないのはどうしてでしょうか」と質問した。

聖ラーマクリシュナ「ああ、もちろん見られるともさ。形のある神様も見られるし、それに姿のない神様だって見られる。あんたにどう説明してわからせたらいいのかなあ？」

ブラフマ会員「どんな方法をとったら見られるようになりますか？」

聖ラーマクリシュナ「無我夢中になって、あの御方を慕って泣けるかい？ 人はわが子のためなら、

女房のためなら、金のためなら、水が一杯ほども涙を出して泣く。けれども、神様を慕って誰が泣いている？ 子供がオモチャで夢中で遊んでいるうちは、母親は料理やいろいろな用事をしている。

(訳注1) 黒い海に……戻らない——古代のインドでは外洋を黒い海と呼び、見知らぬ地、未知へ続くものと見なされており、外洋に乗り出して行くともう戻れないことを意味していたので、それを承知で外洋に出て行く人は、もう何の未練もなく二度と戻って来ないことを覚悟して出て行った。

子供がオモチャに飽きてオモチャをぶん投げてワーツとばかり泣きだすと、母親は火に掛けてあつた鍋を下ろして、アタフタと駆け寄って子供を胸に抱くものだ」

ブラフマ会員「先生！ 神の性格について、どうしてこんなに様々な意見があるのでしょうか？ ある人は神には相形すがたかたちがあるといい、ある人は、いや、神とは無相の实在のことだといいます。そしてまた、神は有形だと主張する人たちでも、その形についてはいろいろと違う話をいたします。なぜこんなに複雑なのでしょう？」

聖ラーマクリシュナ「信者が心の中で思っている通りの形を見るのさ。実際はちつとも複雑でも何でもない。どんな方法でも、一度あの御方をつかんだら、あの御方がすべてをわからせて下さるよ。そっちの方角に向かって歩きもしないでいて、神様のすべてを知ろうなんてどうして出来るかね？

話をひとつ聞きなさい。

ある人が用を足していた。ふと見ると、目の前の樹の上に一匹けものの獣がとまっていた。用を足してから別の人にこう言った。『ね、あそここの樹できれいな赤い色した獣けものを見てきたよ』その人は答えて言った。『私も用を足しに行つたとき見たけれどね、赤い色でなんかあるものか、あれは緑色だよ！』居合わせたもう一人の男が言った。『いやいや、私も見たがね、黄色だよ！』こんなふうにして、他の人たちも中に入つて言いだした。『いや黄色だ』『いや紫だ』『青だ』というわけで、とうとう口論になつてしまった。そこで皆して樹のところへ行つてみると、根元に一人の男が坐つていた。その人に訊いてみると、こう答えた。『私はこの樹の下にいつも住んでいるのですが、あの動物けもののことはよ

く知っています。お前さんたちがいろいろ言っていることは皆、ほんとうですよ。あれは赤いときもあるし、緑色のときもあるし、黄色いときもあるし、青いときもあるし、どんな色にでもなるんですよ！ カメレオンなんです。それに、そんなふうに見えるときもあるし、全然色が無いときもあります。時には性質を現し（サグナ）、時にはどんな性質もなくなる（ニルグナ）。

つまり、年中神様のことを考えている人は、あの御方がどんなものかわかってくる。その人は、あの御方がいろんな形をとって現れて下さり、いろんな方法で現れて下さる——あの御方はあらゆる性質をもち（サグナ）、また一面、全く何の性質もない（ニルグナ）、ということがわかるのだ。樹の根元に住んでいる人には、カメレオンがいろんな色になり、また時々は無色になることがわかっていく。そうでない人たちは、ただ議論や口論ばかりして悩んでいる。

カビール（訳注2）はいつもこう言っていた——無相の实在は我が父、有相の神はわが母と。

信者の好みに合った姿であの御方は現れて下さる。信者に思いやりのある御方なんだよ！ プラーナに書いてあるだろう——勇敢なる信者ハヌマーンのために、神は英雄ラーマの姿をとって現れ給うたと。

（訳注2）カビール——信愛（信愛）を説いたラーマナーンダの弟子で、ヒンドゥー教とイスラム教を批判的ながら統合し、独自の一神教を唱えた十五、六世紀の聖者。様々な名称で呼ばれる神は唯一（唯一）つで、各人の心の中にのみ存在し、必要なのは神の名を称え、心に念ずることのみで、それ以外の苦行、礼拝、巡礼、沐浴、聖典説誦などは一切無用とし否定した。

〔カーリーの姿、シャーマの姿の説明——無限^レを理解することは不可能〕

聖ラーマクリシュナ「ヴェーダーンタの考え方からすると、色や形というものは無いものになつてしまふ。この考え方の最後に行きつくところはこうだ——ブラフマンだけが真実で、さまざまな色や形でできている世界というものは、いわば一種の錯覚だと。私は神の信者だ^レという感じがある間は神様のお姿も見えるし、それに、神様が一つの人格だ^レという感じがどうしても生まれる。だから、智者の目から見れば、信仰者の持つ私^レの感じは、信者と神の間にはすこし距離があるものと映る。

カーリーやシャーマの姿が三キュービット半(175cm)なのはなぜだろう？ 遠いからだよ。遠く離れているから太陽は小さく見える。そばに行けば、まあどんなにデカいものか想像も付かないだろうよ。それからカーリーの姿やシャーマの姿が青色なのはどうしてだろうね？ それも遠いからなんだよ。ちよつと、湖の水も遠くからは緑色や青または黒い色に見えるけれども、そばへ行つて手ですくつてみれば何色でもないのと同じだ。空も遠くから見れば青いが、近寄つてみれば何色でもない。だから言っているのさ。ヴェーダーンタ哲学の考え方では、ブラフマンはニルグナ(無性無相)だと。どんなものか口で言うことが出来ないよ。けれども、あなたが自分というものがほんとうに存在^あると思つている間は、あなたの見ている世界だつてほんとに在るんだよ。神様のいろんなお姿も本当にあるんだし、神様が一つの人格だ^レという感じも真実^{ほんと}のものだ。

信仰^{バクティ}の道があんた方の道だ。これはたいそういいことだ——楽に行ける道だからね。無限の神がどうして理解できる？ それにまた、あの御方を理解することがなぜ必要なのかね？ 有難いことに

人間として生まれることが出来て、わたし等にどうしても必要なのは、あの御方の蓮華の御足を心から慕うことだ。

水差し一杯の水で喉の渇きが治るのに、貯水池にどれだけ水があるか計るなんてことは、わたしには必要ないからね。わたしはビンに半分の酒でフラフラになってしまいうから、酒屋に幾びん酒があるか勘定する必要もないだろう？ ましてや、無限を知る必要なんかどこにある？」

神をつかんだ証拠——第七地とブラフマン智

だが、自己の本性を知って

それに満足し 欲無し

それに安んじ 樂しむ者には

もはや為すべき義務はない

——ギーター 3—17——

聖ラーマクリシュナ「ヴェエダにはブラフマン智の修行者のいろいろな段階が説明してある。あの道は智慧の道でね、大へん難しい道だ。世俗の知恵——つまり、女と金にほんのすこしでも執着が残っていたら真の智慧は得られない。この道はカリユガ（現代）には適当じゃない。

これについて、ヴェエダには七住地というところで説明してある。この七つの段階は心のいる場所だ。

世間のことだけに心がまかけている間は、生殖器と排泄器とヘソが心の住地だ。心は上の方には向かないで、女と金だけに向いている。心の四番目の住地は心臓。ここではじめて靈的に目覚める。そして四方に光を見る。天界の光を見て感動して、すばらしい！すばらしい！と言っている。そうになると、もう下の方には関心がなくなる。

心の五番目の住地は喉。心が喉まで上がると、もう無智も無明も皆消えて、神様のことよりほか、どんな話も聞いたりしゃべったりするのがいやになる。もし、誰かがつまらぬ話でも始めると、その場を外してしまう。

心の六番目の住地は額だ。心がそこにいくと、昼も夜も神様の姿を見るようになる。でも、まだ少し私が残っている。その人はその何とも諭えようもない色相を見て、気違いのようになってその姿に触って抱きつこうとするのだが、できないんだよ。ちょうどランタンの中に灯があつて、この光にすぐ触れそうに思つても、ガラスの板があるからじかに触ることできないようなもの。

頭のとっぺんに七番目の住地がある。そこに心がいくと三昧になつて、ブラフマン智の修行者はブラフマンを直接に見るのだ。だが、その状態では肉体はもう長く保たない。すべて外界というものを意識しなくなつて、何も食べられなくなり、口にミルクを流し込んでやっても皆こぼれ出てしまう。この住地に留まっていると二十一日で肉体は死ぬ。これはブラフマン智行者の話だよ。あんた方は信仰の道だ。たいそう結構な道だし、それに楽だ」

〔三昧の後は仕事は脱落——以前のはなし——タルパナ等の行事の脱落〕

聖ラーマクリシュナ「わたしに向かつてある人がこう言った——『先生！ 私にサマーデーというものを教えて下さいませんか？』（皆笑う）

三昧サマーデーになると、仕事は皆、用がなくなってくる。礼拝称名などの行事も、一般世間の仕事も皆、用がなくなる。初めのうちはいろんな仕事わんさどあるものだ。神様の方角に向かつて進むにつれて、物々しい行しごといは減ってくる。神様の名を称えたり、讃歌をうたったりすることさえできなくなるほどだ。（シヴァナートに向かつて）お前がここに来るまでは、皆してお前の噂はをしていろいろ賞めていたんだよ。それが、お前がここに入ってくるや否や、そういった話はピタリと止んでしまった。そして皆、お前を見て喜んでいるんだ。そして、ああ、シヴァナートさんが来ていらっしやるとというだけ。お前についてのいろんな話は、皆できなくなった。

わたしの場合も、この状態（三昧）になった後で、ガンガーの水でタルパナ（祖先の霊に水を供える儀式）をしに行った。ところが、手の指の間から水がみな流れ落ちてしまふんだよ。ハラダリ（大聖の従兄弟）に泣きながら、兄さん、これはどうしたことかしらとと言って訊くと、ハラダリは、これは聖典の中にガリタハスタと呼ばれている状態ですと答えた。神様にお会いした後は、タルパナのようなお勤めもいらなくなる。（訳註、ガリタハスタ——手がしびれて指が硬直した状態）

讃神歌キールタンの初めに歌うだろう、ニタイ、アマル、マタ、ハテイ！（私のニタイは狂った象マダハテイ）ニタイ、アマル、マタ、ハテイ！気分が昂たかままとつてくると、ただ、ハテイ！ハテイ！ハテイ！と言うだけになる。それから

次はやつとこ、ハタイーと口を動かすだけ。そして最後には、ハと云ったきりサマーデイのような状態になる。その人はずっと聖歌をうたいつづけてきたのが、このとき黙ってしまう。(訳註——ニタイニニテヤーンタを歡喜に酔いしれて狂ったように踊る象に喩えた歌)

バラモンたちの食事どき——はじめのうちはガヤガヤと全くうるさいものだ。皆が木の葉の皿の前に坐るとかなり静かになって、ルチを下さい、ルチを下さいという声が聞こえるだけになる。それからルチや野菜カレーを食べ始めると、ほとんど音は聞こえなくなる。最後にヨーグルトをすすする時は、シユブ、シユブの音だけ——(皆笑う)。食後はお休やすみ眠。みんな全く静まり返る。

だからわたしは言うのさ、(宗教生活の)初めのうちは、何かといろんな行事しごとで大さわぎしているが、神様への道を進むにつれて行事は減ってくるよ、とね。最後はみんな捨ててサマーデイ(神と合)だ。

家庭でも嫁が妊娠すれば、姑さまは家の仕事を減らしてくれる。十ヶ月にもなれば殆ど仕事をしなくてもよくなるよ。赤ン坊が生まれたら、もう全くほかの用は足さなくてもいい。赤ン坊を抱いてヨシヨシとあやしているだけだ。家のなかの仕事は、姑や小姑や兄嫁、弟嫁たちがする」

〔神アツァクラーの化身たちの肉体は三昧の後どうなるか——人々を導くために〕

聖ラーマクリシュナ「サマーデイに入った後は、ふつう肉体を保もっていることはできない。ときたま、人々を導くために肉体を保もたしていることもある——ナーラタたちの場合のようにね。それにチャイタニヤデーシヤ様のような神の化身たちの場合もそうだ。井戸が堀り上がると、人によつてはカゴやスキを

放り投げてしまふ。また人によつては、近所の人が使うかも知れないと思つて、ちゃんとして取つておく。こんなふうには、偉大な魂は人間の苦しみ悲しみを氣遣つてくれるのだよ。こういう人たちは利己的じゃないから、自分たちが智慧をものにしたからもうそれでいい、とは思わない。身勝手な人の話はよく知つてるだろう。ここに小便をしろぐと言えばしない。お前の役に立つことは、どんなことでもイヤだというわけ。一パイサ(銅貨)のサンデシュ(ミルクとさとうで固めた乳菓を店から買つてきてくれるときは、途中で舐めてくる(皆笑う))。

しかし、力の現れ方は様々だ。普通の程度の器量では、人を導くことを恐がるものだよ。貧弱な木っ端は、自分だけじゃ何とか浮いているが、鳥が一羽来てとまれば沈んでしまふ。だが、ナーラダたちは大きな丸太だ。これは自分が浮いてるだけじゃなく、上に人間や牛や、象まで乗せて運んでいける」

ブラフマ協会の礼拝方法と神の栄光讃嘆

未だかつて見たことのない御相かほに接し

歓喜よろこびと同時に私の心は怖れおののく

神々の支配者よ 全宇宙の保護者よ

何とぞ御恵をもつて もう一つの御神姿をお見せ下さい

—— ギター 11 — 45 ——

〔昔話——南神村ドッケーシーヨルのラーダーカーンタ堂で宝石の飾りが盗まれたこと(一八六九年)〕

聖ラーマクリシユナはシヴァナートに向かつて——

「ウン、そうだ。あんたたちは神様のご威光や力をむやみにこまかく説明するが、あれはどういうわけかね？ わたしはケーシヤブ・センにもこの話をしたことがある。いつか、あの人たちが揃ってあそこ(カーリー神殿)に來た。わたしは、あんたたちがどんなふうな講演レクチャーをするか聴きたいものだ、と言った。ガンガーの沐浴場ガートの張出し(チャドニー)のところを集会場にして、ケーシヤブ・センが講演を始めた。とてもいい話で、わたしは前三昧パトツアになってしまったよ。終わってから、ケーシヤブにわたしは訊いてみた——『あんたは、こういうことを何度も繰り返し言うが、何故だね？』とおお神よ、あなたは美しい花を創った。あなたは大空を創った。あなたは星を創った。あなたは海を創った。ってなことを』だいたい、自分が富や権力に関心をもっている人が、神様のご威光をやたらに説明したがるものだ。ラーダーカーンタの神像の宝石飾りが盗まれたとき、シエジヨさん(カーリー寺院の持主ラースマニ家の娘婿)がラーダーカーンタ堂に行つて神像に向かつてこう言つた——『チエツ、神さま！ あなたは自分の宝石飾りを護ることもできなかつたんですか！』私はシエジヨさんに言つてやつた——『あんたは何て頭の弱い奴なんだ！ あの吉祥天ラクシュミー(富と幸運の女神)が侍女としてお仕えしているあの御方にお力がないなんて、よくも考えられたものだ！ あの宝石は、あんたにとってははえらく貴重な品物かもしれないが、神様にとつてはただの土くれだよ！ そんな阿呆な言葉を口にしなさんな！ いったい、どんな結構なものをあんたはあの御方に差し上げることができるといふのかね？』と。だからわたしは、

いつも言っている。人は、一緒にいるだけで喜びを感じられる人を求めるものだ、と。その人の家はどこにあるか、いく部屋の家か、庭はどんなか、財産はどれほどか、下男や女中は何人か、なんてことを訊いて何になる？ わたしはナレンドラに会うと何もかも忘れてしまう。家はどこか、お父さんは何しているか、兄弟は何人か、こんなようなことをただの一回だつて訊いたことはない。神様の甘く香ぐわしい水に飛び込め！ あの御方の創造は無限だし、豊饒とみも無限だ！ そんなこと知つて、何の役に立つんだい！」

再び、あの楽神ガンダルヴァも及ばぬ声で甘美な歌を――

沈め 沈め 沈め

美しき海に わが心よ

深き底に 行きて探せば

聖愛あひの宝珠たま 汝が手に入らん

探せ 探せ 探せ

汝が胸なに 神のふるさと（プリンダーヴァン）

ともせ ともせ ともせ

智慧の灯ひを いつも明るく

ドスン ドスン ドスン

たれが舵をとるのか この固い大地で

きけ きけ きけ とカビールは言う

師のみあしを求めよと 慕えよと

「神様にお会いした後で、信者はあの御方の遊戯はどんなものか見たいという欲が起こる。ラーマ王子が羅刹王ラーヴァナを滅したあとで、羅刹の都にお入りになった。するとラーヴァナの母親の鬼婆ニカシャーが逃げ出した。ラーマの弟ラクシュmanaは呆れて言ったものだ——『ラーマ！ 奇妙なことです。このニカシャーはこんなに年寄りで、しかも息子が殺されたというこの世で最大の悲しみに遇ったのに——それなのに命を惜しんで逃げ出すなんて！』ラーマ王子がニカシャーに生命の保障をして面前に呼び出し、この期に及んでどうして逃げるのかと訊いてみると、鬼婆は答えた。『ラーマよ、今日まで生きていたからこそ、お前さんの遊戯をここまで見られたのじゃ。お前さんがこれから先、またどんなリーラーをするのか見届けたいと思つてね』（一同爆笑）

シヴァナートよ、お前に会うのは嬉しいよ。きれいな精神の持主たちに会えないなら、こうして生きてる甲斐もない。きれいな心の人たちと、きつと前の世で友だちだったに違いないと思うんだ」

一人のブラフマ協会の会員が質問した。

「先生！ あなた様は再生を信じていらつしやるのですか？」

〔再生——『アルジュナよ、わたしも君も何度となくこの世に生まれて来たのだ』^{キリクラー4.15}〕

聖ラーマクリシュナ「はい。わたしは再生はあると聞いている。神様のなさることが、われわれの貧弱な狭苦しい頭で理解できると思うかね？ 大ぜいの人がそういつているから信じないわけにはいかない。ビーシュマがまさに死のうとして矢の床ゆかに横たわっていなさったとき、パーンダヴァの兄弟たちは、聖クリシュナといっしょにそこに立って見守っていた。かれらはビーシュマの目から涙が流れ落ちるのを見た。アルジュナは聖クリシュナに向かって言った。『同胞よ、意外です！ わが祖父なるこのビーシュマ様は誠実で自制力強く、智慧深く、しかも八人のヴァスキョウダイ（天人階級）の一人です。これほどの御方が、肉体を捨てるときに迷ってお泣きなさるとは！』聖クリシュナがビーシュマにこのことを言ってお話を訊ねると、こう答えなされたよ。『クリシュナよ！ あなたにはよく分かっておられるはず、私は死ぬのがいやで泣いているのではない！ 神、自らがパーンダヴァたちの御者であるにもかかわらず、彼らでさえも悩み苦しみの果てがない。これを思うと、自分は神の行動を何一つ理解していなかった、という慚愧ざんきの念にかられて泣いているのだ』と」

〔信者と共に楽しい聖歌キリクタン〕

礼拝堂で夕べの祈りが始まった。夜の八時半ころである。祈りが始まって二時間ほどで、月の光が空にあふれてきた。庭園の樹々やつる草は、秋の月の清らかな光のなかに、まるで泳いでいるように見える。一方、礼拝室では聖歌サンキリクタンの合唱が始まっている。至聖なる聖ラーマクリシュナは、神カウの愛に

酔って踊っておられ、ブラフマ協会たちは横太鼓とカルタル(小さいシンバル)で伴奏しながら、その御方の囲りをぐるぐる廻りながら踊っている。一人残らず恍惚と酔ったようになって、聖なる大神にじかに会っているかのようだ！ハリの名を呼ぶ声は次第次第に高まっていく。あたりの村人たちも、この声を聞いているだろう。そして、信者たちはそれぞれに心の中で、この庭園の持主であるベニー・マードヴァにどんなに感謝していることだろう。

聖歌が終わると、聖ラーマクリシュナは大地に額ぬかずいて、世界の大実母を礼拝された。拝みながらこうつぶやいておられる。『バーガヴァタ(聖典)、バクト(信者)、バガヴァン(神)。智の行者の御足を拝みまつる。信の行者の御足を拝みまつる。有形の神の信者の御足を拝みまつる。無形の神の信者の御足を拝みまつる。その昔、ブラフマン智を求めて修行した人々の御足を拝みまつる。ブラフマ協会の——現代のブラフマン智行者の御足を拝みまつる。』

ベニー・マードヴァは様々な種類のおいしい食べ物を用意して、集まったすべての信者会員たちに満足のいくまでごちそうした。聖ラーマクリシュナも、皆といっしょにお坐りになって心から楽しんでお下ブラサードがりを召し上がった。